



私のアマチュアオーケストラ日記

会員 辻 亜希子 (67期)

1 日曜の夕方になると…

毎週日曜日の夕方、私はバイオリンを背負って自転車で近所の小学校に行く。所属しているアマチュアオーケストラの練習に参加するためだ。

団員が続々と集まり、譜面台と椅子を並べ、様々な音が交錯する。開始時間になるとコンサートマスターが立ち上がり、オーボエの出すA（ラの音）に合わせてチューニングをする。そしてよいよ練習の始まりだ。

2 ダイバーシティ&インクルージョン?

団員は、年齢も性別も職業も実に様々な人たちだ。会社員、学校の先生、医療関係の人や飲食店経営者もいる。老若男女（「若」はかなり少なめ）が入り混じっているが、共通するのは「音楽が好き」「合奏がしたい」という気持ちだ。この気持ちが何より大事にされるため、技術面には比較的寛容である（と、私は信じている）のがとてもありがたい。

弦楽器と管打楽器では出す音も全く違うし、曲の中の役割も異なる。様々な人がお互いを尊重しあい、心を合わせて一つのハーモニーを作り上げる、これぞまさに多様性と包摂性（ダイバーシティ&インクルージョン）だなと感じ入る。

3 楽聖たちはどう思っているのか

練習中よく思うことがある。「ベートーベンもブラームスも、自分が作った曲が、数百年後、ヨーロッパから遠く離れた東洋の国の片隅で、一般庶民によって演奏されているとは、よもや想像しなかつただろうな」ということだ。難しい曲を前にして悪戦苦闘している私たちのことを、草葉の陰の楽聖たちはどう思っているのだろう。「よしよし、頑張りなさい」と目を細めているだろうか。もしかしたら、「けしからん！ちゃんと練習して弾きたまえ！」と眉をひそめているかもしれない。ごめんなさい、ちゃんと練習してきます、と心の中で謝って、「要練習箇所」には譜面にこっそり印をつけておく。



4 新型コロナの影響

新型コロナウイルスの流行により、アマチュアオーケストラも影響を受けた。練習場所が確保できなくなり、予定していた演奏会は中止になった。ようやく練習を再開できたときは、「合奏っていいな」とメンバーの誰もが改めて感じたと思う。感染対策を行いながら演奏会本番も実施できるようになり、2022年暮れに行った演奏会では、本番中のマスク着用は任意になった。私は喘息があり、練習中時折咳込むので本番もマスクをつけたが、不思議と本番中は咳が出ない。なぜかと考えたのだが、本番中はいつも以上に集中してきちんと呼吸しながら弾くからではないかと思っている。練習中咳込むのは、難しい箇所を楽譜にかじりついて弾いて、息が止まっているからだろう。呼吸は大事だと実感する。

5 もっと上手になりたい

人生の折返しを過ぎた私は、体力も落ち、若いころにはできていたことができなくなったと感じることが多い。しかし、バイオリンだけは若い頃より今の方が上手に弾けると思っているし、今後もっとうまくなれるかもしれないと期待している。このように思えることがたった一つだけでもあることは幸せだ。

将来、仕事や生活にゆとりができれば、個人レッスンに通って基礎を鍛錬し直したい。そして80歳くらいになっても、若い仲間と合奏を楽しめたらよいなと夢見ている。